



神奈川県

KANAGAWA

生物多様性

「今、私たちにできること」
100年先でも、問い続ける





いつも、そこにある自然 = 「生物多様性」

introduction

私たちが暮らす日本には、どれくらいの生きものが存在するのでしょうか

確認されているだけで約9万種、まだ知られていないものも含めると30万種を超えると推測されています。これらの生きものたちは、森や里、川や海など、切れ目なくつながっている様々な生態系の中で、複雑に関わり合いながら生きています。さらに、一つひとつの種には、遺伝子のレベルで様々な違いがあり、同じ種であっても、形や大きさ、模様が異なるなど、全く同じものは存在しません。

このように、生きものの「種」、それを育む「生態系」、そして環境への適応や種の分化に関わる「遺伝子」という3つのレベ

ルで生きものの多様性は存在しており、個体や様々な生息・生育環境ごとに個性があるとともに、生きもの同士の関係、生態系同士の関係において、様々なつながりを持っています。例えば、生きもの同士の間では、食べる・食べられるといった食物連鎖の関係や、寄生する・住み場所を提供する、資源をめぐって競争する、死んだ生きものを分解するなどの関係が生まれます。

生きものの種類が多様であれば生きもの同士の関係も多様になり、これらの様々な相互作用によって、生きものたちは環境への適応や進化を繰り返してきました。

“生きものの恵み”に支えられる 私たちの暮らし

例 えば、森林は、大気中の二酸化炭素を吸収し酸素や水蒸気を放出する働きを通じて、気候の調節や大気成分調整に大きな役割を果たしています。さらには、雨水を蓄え時間をかけて川へ流すため、安定的に水を供給することや洪水を緩和することができるほか、傾斜地での地滑りを抑制したり、台風発生時に強風を和らげるなどの働き、建築用材、紙などの原材料となる木材を供給する働きなどがあります。

また、昆虫や鳥は、花粉を運び受粉させる働きによって果物や野菜などが実を結ぶことを助けています。これらの生きものの多様性が失われてしまうと収穫も減少し、日々の安定した食料の確保に影響を与えることもあります。

このように、生態系や生きものの働きは、私たちの暮らしの安全や、生きていく上で重要となる資源の供給など、日常生活の基盤となっています。

これらの様々な恵みを将来にわたって享受し続けるためには、生物多様性が暮らしと密接に関わっていることを知り、その大切さを認識することが必要です。

日常の中から感じとる
生きものの恵み

【 原材料を供給する働きに注目する 】

食卓を彩る食材

ご飯に味噌汁、肉・野菜・魚など、
日々の食卓は、「大地や海のめぐみ」によるもの

蛇口ひとつで使える水

山に降った雨を地中に浸透させ、ゆっくりと溪流に
流出させる森林の働きによって、良質な水が作り出される

衣類やタオルなどの生地

綿（コットン）、麻（リネン等）、絹（シルク）、
羊毛（ウール）などの天然繊維は、動植物が原材料

新聞や雑誌、ノートなどの紙製品

紙の原料となるパルプは、
木材や繊維を含む植物から取り出されたもの

【 技術や文化的な働きに注目する 】

日用品の加工技術

傘の布地の表面に施されている加工は、ハスの葉の
「はっ水効果」を参考に開発されたもの

絵を描く、写真を撮る

絵画や写真など、自然物が趣味の対象になるのは、
私たちの精神や文化との深い関わりがあることの表れ

みどりによる効果

公園や並木道を歩いて感じる。「木陰って涼しい。」
みどりを眺めて心が安らぐのも、自然が発揮するチカラ



微妙なバランスの上に成り立つ 生物多様性



「ある岩場でヒトデを取り除いたところ、それまでヒトデが捕食していたフジツボが岩場を覆い尽くすように増えた。すると、岩場の藻類は育たなくなり、藻類を捕食していた貝類が減少した。その結果、15種もの生きものが生息していた岩場は、実験終了時には8種にまで減少した。」

生態学の分野に多大な影響を与えたロバート・トリート・ペイン博士による実験ですが、これによりキーストーン種^{*}の存在が証明されたと言われています。

生態系は生きもの同士の複雑な相互作用によって成り立っています。そして、長い年月を経て育まれてきた生物多様性は、一度損なわれると、再び人の手で作り出すことは極めて困難なものです。生きものの恵みを楽しみ続けられるよう生物多様性を守り、持続可能な利用をしていくことが重要なのです。

^{*} アーチの頂部で全体を支える要石（かなめいし）に由来。個体数が少なくても、その種が属する生態系に及ぼす影響が大きい種を言い、それがないと全体の安定に欠かせない重要な存在を指す。



A close-up photograph of a person's hand holding a small, light-colored lizard. The lizard is positioned horizontally, facing right. The background is blurred, showing what appears to be a person's face and some greenery, suggesting an outdoor or semi-outdoor setting. The lighting is soft and natural.

生物多様性を“意識する”

things we can do

立ち止まって考えてみませんか、生物多様性のこと —

生 きものの恵みは、私たちの暮らしに密接に関わっていますが、農業や漁業など第一次産業による供給のように直接的で、わかりやすいものばかりでなく、間接的なつながりとして暮らしに関わっていることも多く、何気なく見過ごしてしまいがちです。日ごろから自然環境や生きものに興味を持つことは、生物多様性を理解するきっかけとなります。



“きっかけ”から実践へ！！

アンテナを少し張ってみる。すると、日常の中から生物多様性を理解するきっかけをつかめそう



「いただきます」の心
食卓の彩りは、いのちの恵み。私たちは日々、様々ないのちをいただいて生きていることを感じ、感謝の心を持って行動することが大切です。そう、残さず、無駄にしない。「いただきます」「ごちそうさま」、ここから始まります。

まずは

→旬のものを味わいます

これも



製品の製造過程を知る
パッケージなどで見かける「環境ラベル」。持続可能で適切な管理がされた漁業・森林から生産されていることの認証など、生物多様性への配慮を表すラベルもあります。知ることは、選ぶという配慮につながります。

→環境にやさしい商品を選びます



自然環境を守る様々な取組みを知る
地域で活動する市民団体、地元企業、市町村などが、生物多様性の保全や配慮のための様々な取組みをしています。身近なところでどんな取組みが行われているのか、調べてみるのもいいですね。

→地域の活動などに参加します

みんな



気軽に

自然の中でリフレッシュ
都市の身近なところには公園や樹林地などがあり、散策すると清々しい気持ちになりますね。樹木には、精神を安定させる効果があります。自然の中に身を置いてみると、人や生きものたちとのふれあい、新たな発見などがあるかもしれません。

→自然や生きものにふれます

自然や生きものをテーマとした本を選ぶ
余暇に図書館や書店へ足を運んでみては？
自然の仕組みの素晴らしさや、生きもの同士のつながり・個性を伝える読み物、絵本、図鑑など、様々な図書に出会うことができます。



→生物多様性を考えます

違う角度でモノを見てみる
身の回りには、生きものの機能や構造をまねて応用してきた技術がたくさんあります。例えば新幹線。カワセミのくちばしの形状を応用し、空気抵抗を抑制しています。長い歴史の中で培われてきた生きものゆえの合理性や仕組みは、可能性にあふれています。いつも使っているものでも、角度を変えてみると、気づくことがあります。



なるほど！

あなたは、何からはじめますか？

私 たち一人ひとりが「自分のフィールドで無理なくできること」を考え、行動していくことが、やがて、大きな力へと変化していきます。



身近な取組みを、知る

eco effort

自然にふれる、守る、配慮する。生物多様性の保全や配慮につながる取組みは、地域を大切に思う市民団体や企業などでも、様々なフィールドで行われています。県内で活動している3つの市民団体・6つの企業から、それぞれ活動の一端を紹介していただきました。



市民団体
でも

自然観察や里山保全活動、 地域に根付いた取組みなど

自分たちの住むまちをよくしたい、自然の素晴らしさを伝えたい。様々な思いから活動が始まり、つながりをもっていく。「生物多様性」を意識していなくても、自然環境を保全する多くの活動が生物多様性の保全につながっています。



知ることから、つながることへ。一歩ずつ

市 町村では、自然環境や生きものに関する基礎調査や希少種の保護などのほか、地域住民と連携して外来生物の防除対策を行うなど、様々な取組みをしています。また、市民・団体・事業者などとともに生物多様性について考え、取組みを進めていくために協議会を設置したり、シンポジウムやホームページなどを活用して生物多様性に関する理解を深めていくなど、普及啓発事業に力を入れている市町村もあります。

さらに、近年では、生物多様性基本法に基づく計画（生物多様性地域戦略）を策定し、計画的に生物多様性の保全を推進している市町村も見られるようになってきています。

飛森（とんもり）谷戸での「里都山づくり」

飛森谷戸の自然を守る会

当会は、1996年に発足後、川崎市の生田緑地をフィールドとして、川の清掃、草刈、田んぼづくり、ゲンジボタルの保護活動などのほか、昆虫観察会や農業体験の開催などを通じて、地元自治会等とも連携した地域コミュニティを形成しています。雑木林は人が手を加えなければ消滅していくものです。多くの動植物が共存しているこの谷戸を、子ども達の自然環境学習の場として残せるよう、私たちにできることは何かを考え、伝えたいと考えています。



谷戸づくりのメンバー

「あつぎこどもの森」での生物多様性を豊かにする活動

あつぎこどもの森クラブ

厚木市荻野地区にある「あつぎこどもの森公園」は、公園整備に当たり、厚木市と市民団体の代表、学識者を交えたワーキンググループを設置するなど、市民協働による整備が進められた公園です。公園開設と前後して、公園利用への思いのある市民団体によって「あつぎこどもの森クラブ」を設立し、無農薬冬季湛水水田耕作を行う農業プロジェクトのほか、自然、冒険で構成する3つのプロジェクトにより、リーダー養成や生きものが豊かに暮らせる場を目指した草刈りなどのエコアップ活動をしています。



園内のエコアップ活動

「やどりき水源林」における動植物の調査・保全活動

NPO法人 かながわ森林インストラクターの会

松田町にある「やどりき水源林」は、人工林や広葉樹を一つの間でみることができ、「見て学ぶ」「体験する」「検証する」「交流する」場として活用されています。当会は、水源林の案内人として、訪れた方たちに水源林の保全・再生活動に対する理解と協力を得るための活動を行うとともに、この水源林の持つ魅力を伝えるため、動物、植物、土壌・水生生物の3分野での調査活動も行っています。長年の調査結果は、案内人活動にも反映されているだけでなく、動植物の保全活動にも活用されています。



水源林の案内人活動

企業でも

動き出している企業がある。事業活動として、社会貢献活動として



考え方や分野は様々ですが、日々の「気づき」の中から一歩ずつ、実践行動が生まれています。

金目川水系の水源かん養・保全活動 横浜ゴム(株)平塚製造所

当社では、地域の金目川水系の水資源の保護を目的として、鳥類、植生、水質、水生生物の確認や、生態系に影響を及ぼす外来植物の抜根など、金目川の河川環境のモニタリング活動をしています。現在は、カゲロウの幼虫などの底生生物のスコアリングによる水質評価も進めています。また、河原ではアレチウリなどの外来植物が繁茂し、在来植物が衰退しつつあることから、行政や地域活動団体の方々のご理解とご協力を得て、外来植物の駆除活動を継続的に行い、植生変化を観察しています。

外来植物の駆除活動▶



絶滅の危機に瀕するハマカンゾウの保全 東芝ライテック(株)本社・横須賀工場

社内で初の生物多様性の取組みを検討していた時、NPO法人小網代野外活動調整会議との交流で、小網代の森で盗掘被害に遭い、絶滅の危機に瀕するハマカンゾウのことを知りました。さらに本社・横須賀工場の立地環境がハマカンゾウの生育環境に近いこともわかり、NPOと連携し当社敷地内で保全することにしました。移植した28株は、2年間で100株まで増殖し、小網代の森に返還しました。現在は、東芝グループと大日本印刷グループとの生物多様性連携活動の一環として、(株)DNPテクノパック横浜工場と協同でハマカンゾウの保全繁殖を進めています。

本社・横須賀工場のハマカンゾウ▶



希少植物の保全活動 武田薬品工業(株)湘南研究所

新研究所建設の際に実施した環境影響予測評価において、敷地内に希少植物種の自生を確認して以来、希少植物種の保全活動を継続しています。現在、敷地内に10か所の保護区域を設け、生育状態のモニタリングと植物環境の維持に努めています。また、当社の京都薬用植物園では、世界中から収集した貴重な薬用植物約2800種を保有し、特に絶滅危惧種に指定された薬用植物の保全に積極的に取り組んでいます。漢方製品に使用している生薬の自社栽培にも早くから着手し、生物多様性保全につながるよう、野生品から栽培品への切り替えを検討しています。

敷地内の希少植物保護区域▶



指定管理業務における環境保全と生態系調査 東急リゾートサービス・石勝エクステリア共同事業体

東急リゾートサービス・石勝エクステリア共同事業体では、川崎国際生田緑地ゴルフ場において、コース内の環境保全及び生態系調査を実施し、指標種として選定した動植物を「誘致するもの」「保全するもの」「駆除するもの」に分け、コース管理計画に反映しています。コース管理では、樹木の間伐やササ刈りによる「雑木林環境の復元」「実生苗と野草の育成」、また、絶滅が危惧されるスジグロボタルやホトケドジョウが息づくコース内水路の水質を良好に保つなど、ゴルフ場内の生物多様性に配慮した環境保全に取り組んでいます。

川崎国際生田緑地ゴルフ場▶



都市におけるビオトープの整備による地域貢献 三機工業(株)

当社の行動指針の一つとして、地域社会の発展に寄与するため社会貢献に努めることを定めています。80周年記念事業の一環として開園した「三機自然環境園」は、自然の浄化作用を最大限活かした約1,000m²のビオトープです。大池、小池、湿地帯、せせらぎ等で構成され、市街地における生物の休憩・繁殖地として地域の生物多様性の保全に寄与しています。平日は一般開放しており、開園12年目となる2016年には、来場者10,000人を達成しました。今後も地域の皆さまと積極的なコミュニケーションを図りながら、企業の社会的責任を果たしていきます。

三機自然環境園▶



社内における生物多様性の保全活動 ソニー(株)厚木テクノロジーセンター

活動において、まずは社員やその家族と楽しみながら自然に触れ、自然を大切に思う心に気づく事が大切と考え、社内活動として落ち葉の腐葉土化、巣箱の設置、自然観察会等を実施しています。社内緑地で開催する自然観察会では、落ち葉の腐葉土には多くの地中生物を観察でき、生き物たちのお蔭で腐葉土ができることに気づいたり、使用後の巣箱の観察では、鳥の種類によって巣作りが異なることを知るなど、沢山の発見や気づきがあります。厚木テクノロジーセンター内での様々な生態系の繋がりが理解できるとともに、楽しみながら新たな発見ができる場として開催しています。

社内緑地における自然観察会▶



これらの取組みの詳細は、神奈川県ホームページ「かながわ・生物多様性・情報サイト」において紹介しています。

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f12655/p1061260.html>





つないでいく、取組みの輪

生 きものの恵みを絶やすことなく、次の世代に引き継いでいくためには、社会で生活する一人ひとりの地道な行動が大きな力となります。

無理なくできることを継続していくために、自らの取組みを身近な人に知ってもらうとともに、取組の輪を広げていきませんか？

印刷製本費寄附：株式会社アマダホールディングス、株式会社荏原製作所藤沢事業所、武田薬品工業株式会社、三菱電機株式会社情報技術総合研究所、横浜ゴム株式会社平塚製造所、三機工業株式会社大和事業所

表紙・裏表紙ほか写真協力：写真家 三宅 岳 (みやけ たく)

1964年生まれ。旧藤野町（現相模原市緑区）育ち、現在も在住。東京農工大学環境保護学科卒。山の写真家。山岳風景から林業に至るまで撮影。『アルペンガイド丹沢』（山と溪谷社）、『炭焼紀行』（創森社）など著書多数。神奈川県知事が任命する自然環境保全指導員でもある。

環境農政局緑政部自然環境保全課 神奈川県横浜市中区日本大通1 〒231-8588 電話 045-210-4310
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f12655/>



かながわ 生物多様性

検索

